

## 中国人向けの日本語教育法についての試み ——南京大学日本語科の読解授業を例として

彭 曦 (Peng Xi)<sup>1</sup>

### サマリー

従来の日本語教育法は第一言語非日本語の学習者一般向けのもので、中国人の漢字力を考慮に入れていない。そのため、中国人の日本語学習における優位が十分に生かされていない。中国人の漢字力および大学生のもつ認知能力を積極的に生かせば、早い段階から内容中心の読解学習に移ることが可能で、日本語学習の効率を大幅に高めることができる。

**キーワード:** 南京大学、漢字力、推測力、内容中心

### 問題提起

国際交流基金の2012年度の統計によれば、中国人日本語学習者は全世界の26.3%を占め、約105万人で世界第一位。中国の日本語教育機関は1800機関あり、日本語教師は約1.7万人<sup>2</sup>。また、中国日本語教育研究会の統計によれば、600以上の4年制大学に日本語科が設置されている。しかし、中国における現在のような日本語学習の盛況は、30数年前から始まったに過ぎず、採用されている教育法は主に日本から伝わったものである。そして、日本における日本語教育法は主にアメリカを中心に発達した第二言語習得理論に基づくものといえよう。すなわち、それは日本語学習者一般向けのもので、中国人に特化した教育法ではない。日本での日本語教科書の定番は「基本的な文型をやさしいものから難しいものへ積み上げ、聞くこと、話すことを中心に学習する総合教科書」と銘打つ『みんなの日本語』である。その流れを汲む中国の日本語教科書の典型といえば、広く使われている『新編日本語』（周平、陳小芬編著、上海外国語教育出版社）である。このような日本語教科書の共通点は、学習者が白紙状態から日本語を学ぶことを想定していることである。全く予備知識を持たないため、一から教えなければならない。一気にたくさんのことを教え込んでも吸収できないので、少しずつしかも繰り返し練習することを通して身に付けさせる。どうしてもこのような方法を取らざるをえない。その結果、学習期間が長くなってしまふ。横文字を第一言

<sup>1</sup>学術博士（地域研究）南京大学外国語学院日本語科副教授（Ph. D. in Area Studies, Tokyo University of Foreign Language. Assistant Professor, Department of Japanese, School of Foreign Studies, Nanjing University.） Email: pengxi@nju.edu.cn

<sup>2</sup>国際交流基金『2012年度日本語教育機関調査結果概要』。

語とする学習はそうするしかないかもしれないが、中国人日本語学習者の事情はそれと根本的に違う。この極めて重要な基本的事実に、中国人自身も長い間気付いていない。その結果、中国人に横文字を第一言語とするその他の国の人と同じ教育法で教えているのがほとんどである。

中国では近年、大学の定員増などにより、大学生の就職がさらに厳しくなってきた。そんな中、学科別のたて割り型科目設置の見直しが進められてきたが、筆者の勤務する南京大学は2009年から教養教育重視のカリキュラムの導入をはじめた。一方、職業教育を重視する動きは、高等専門学校から昇格した大学を中心に広がりつつある。いずれにしても、日本語をはじめとする外国語を専門とする学生にとって、語学だけでは不十分である。それ以外に何か専門知識あるいは技能をもつことが求められる。いわゆる競争力のある「複合的人材」像である。いうまでもなく、それは語学の学習時間が減らされることを意味する。学習時間は減らされるが、語学力に対する要求はむしろ高くなっている。そこで、日本語学習の効率化がもっとも重要な課題となってくる。本論は、南京大学日本語科の取り組みに即しながら、この問題について考えてみたい。

## 1. 日本人と中国人の漢字力

いうまでもなく、中国は漢字を使う国である。東アジアでは、過去に中華帝国を中心に漢字文化圏が形成されたことがあり、朝鮮半島、日本、ベトナムがそれに属していたが、朝鮮語はハングル、ベトナム語は独特の補助符号を用いるローマ字体系を使うようになり、依然として漢字を使っているのは中国以外では日本だけとなっている。

では、漢字が日本語の中にどれだけ使われているのか。それを見る目安の一つはいわゆる「常用漢字」である。1981年公示の「常用漢字表」では、1945字だったが、2010年の改定で2136に増えている。このほか、166字の人名漢字がある。漢字は造語力が極めて強く、その組み合わせによって多くの単語が作られている。下表のとおり、「学」を例にすると、和語としての「学ぶ」のほかに、漢語として、前付のものには「学生」「学校」「学習」「学者」「学術」など、中付のものには「小学校」「中学校」など、後付のものには「大学」「漢学」「古学」「洋学」「化学」「科学」などがある。日本語能力試験N1の1万語以上の語彙のなか、漢字のあるものは約7割を占め、新聞記事や一般文書の漢字使用率も大体これと同じである。残りは平仮名語とカタカナ語となっている。日本では、文部科学省による小学校学習指導要領に「学年別漢字配当表」というものがあり、小学校の段階では1006字を学ぶことになっている。なお、中学校や高校の漢字学習について具体的に定めていない。いずれにしても、日本人の漢字力はおおよそ2千字程度と言えらるだろう。

次いで中国人の漢字力について見てみよう。中国にも日本の「常用漢字表」に当たる「通用規範漢字表」というものがある。2013年版を見ると、収録漢字は8105字で、三つのレベルに分かれている。1級の3500字は、義務教育段階の学習漢字で、2級の3000字は高校・大学段階に覚えるべき漢字と理解してよいと思う。残りの1605字は人名地名および専門用語に使う漢字である。つまり、中国人は、高校卒業の段階で、5000字程度の漢字を覚えているはずである。この5000字は、日本の常用漢字をほぼカバーしている。完全ではないのは、日本語の「常用漢字」には日本人自身の作った「国字」が10字ほど入っているからである。

もちろん、日本語の漢字と中国語の漢字は全く同じではない。まず、書体の違いがある。中国語では主として簡体字が使われているが、日本語では昔の書体、すなわち繁体字が使われているほか、日本式の略字があり、さらに日本人自身の作った国字もある。次に、語彙の種類が違う。日本語の語彙には漢語、和語、外来語の三種類あり、漢字と関係するのは前の二つである。漢語はほとんど現在中国語の語彙と共通しており（現代中国語には、多くの日本漢語が含まれていることがその原因の一つ）、和語は漢字を使うものの、現在中国語の語感から理解しにくいものも少なくない

<sup>3</sup>。しかし、漢字は表意文字であるため、文脈のなかでヒントとなりうる場合が多い

<sup>4</sup>。第三に、発音が違う。日本語漢字は、二通りの発音の仕方がある。一つは音読みで、もう一つは訓読みである。音読みは中国語に真似して生まれた発音だが、現在の標準語との対応関係が明確ではなくなっている。でも、漢字音を一度覚えてしまえば、同じ漢字が使われる別の単語の発音が覚えやすくなる。それから、訓読みは日本固有の発音を漢字にあてたもので、両者は元々無関係である。

こうした違いがあるにせよ、日本語国字の数は10字程度で、常用漢字全体に占める割合が極めて低い。中国でもすべての漢字が略字化しているわけでもないし、繁体字版の古典は依然として読まれていることや、一部の人や一部の場合において繁体字が依然として使われていることから、書体の違いは大きな障害にはならないと言えよう。中国語にない日本語の語彙であっても、孤立の場合とはかく、ある文脈のなかに置かれていれば、おおよそ見当がつくものである。発音

---

<sup>3</sup>筆者が日本語能力試験語彙の構成を調査した結果、1万語のうち、漢字表記のある語彙は7162語ある。そのうち意味が全く同じあるいは大抵同じのものは4782語、部分的に同じものは257語、漢字から容易に意味が推測できるものは1282語、形が同じで意味が違うものは128語、漢字から容易に意味が推測できないものは703語、それぞれある。

<sup>4</sup> 筆者の指導した大学院生韓秋燕 (Han Qiuyan) は2014年にある修士論文執筆のため、日本語学習歴のない80数人を対象にある調査を行った。調査方法は字数100~200字の文章から12段落を抽出し、その中からJLPTのN2レベル以上の語彙を30語選出し、その意味に対する理解を確認した。全体の平均正答率は約74%という高い水準に達し、韓秋燕『中国語にない和語の正解率も約70%となっている。中日同形語の習得における母語及びコンテキストの影響——中国語母語話者を中心に』(2014年度南京大学修士論文)

は、会話や聴解の場合には不可欠だが、読解の場合にはできなくても構わない。

表 「学」で構成される中日語彙の一覧（下線のある個所は違う所）

日本語		中国語		意味
漢字 表記	発音 (平仮名)	漢字表記	発音 (ピンイン)	
学 <u>ぶ</u>	まなぶ	学	xué	study, learn
学生	がくせい	学生	xué sheng	student
学校	がっこう	学校	Xué xiào	school
学 <u>習</u>	がくしゅう	学 <u>習</u>	xué xí	study, learn
学者	がくしゃ	学者	xué zhě	scholar
学 <u>術</u>	がくじゆつ	学 <u>術</u>	xué shù	arts & sciences
小 <u>学</u> 校	しょうがっこう	小学	xì ǎ o xué	elementary school
中 <u>学</u> 校	ちゅうがっこう	中学	zhōng xué	junior high school
大学	だいがく	大学	dà xué	university
<u>漢</u> 学	かんがく	<u>漢</u> 学	hàn xué	Chinese classics
古学	こがく	古学	g ŭ xué	classics
洋学	ようがく	洋学	yáng xué	western arts and sciences
化学	かがく	化学	Huà xué	chemistry
科学	かがく	科学	Kē xué	sciences

総じていえば、中国人の漢字力が日本人の倍以上あり、読解に限っていえば、高卒レベルの日本語学習者は、日本語を学ぶ前からすでに数千の語彙が理解できているということになる。しかし、残念なことに、従来の日本語教育法では、中国人のこうした優位性があまり意識的に生かされてこなかったのである。

## 2. 見直しの方向性

従来の日本語教育法が採られている日本語教科書の構成は、たいてい本文、会話、新出単語、文型の説明、練習からなっているが、単語や文型に制限により、初級や中級段階では、易しい短文しか出てこない。日本語能力試験N3（学習時間数450時間）まで初級、N2（同600時間）まで中級とすれば、日本語の学習が一年半経っても長い文

章に接することがなかなかできないし、N2の難易度でも、せいぜい日本の中学校程度のものである。大学で日本語を専門として学ぶことになれば、学んでいるのは日本語そのものに限られ、日本語を学びながら、あるいは日本語を通して大学生らしい学習ができない。いわば、大学生の小中学生化という現象が起こる。日本語人材が飽和状態にある今日では、そのような形で大学四年間をほとんど日本語の勉強に費やした学生は、就職に非常に不利である。こうしたなか、日本語教育法の見なおしの気運が高まりつつあるのである。

それでは、見なおしの方向性をどこに求めるのか。もとより、文章とは一定のルールすなわち文法に従い、配列した語彙すなわち文の連続ではあるが、文の中のそれぞれの単語には意味があり、互いに意味的関連性で結ばれている。たとえば、『新編日本語』第10課に出てくる「宮本さんを訪ねました」「夏休みはその前の日に終わりました」「李さんは国へ帰りました」といった文の場合、中国人にとって漢字だけで理解できる。ましてや取り上げられている話題は学習者の知っているものであれば、漢字力とその話題に対する「大人の理解力」に頼るだけで、文章の趣旨が大体掴めるのである。つまり、この場合、格助詞や過去形などの文型に関する知識は、より正確に理解するためのものであって、理解の前提ではない。文章の場合でも、同様なことが言える。以上は、日本語を全く勉強していないという仮定のもとに立ってしている議論であるが、教師の指導や辞書の使用により、じっさい予測の正解率が徐々に向上していくことができるのである。

従来の日本語教科書が、意味的関連性、あるいは「大人の理解力」に基づくのではなく、表現の仕方すなわち「基本的な文型」、しかも「やさしいものから難しいものへ」という順序に基づいて作られており、それが内容を大きく制約していると前に指摘したが、その「やさしいもの」「難しいもの」を区別する基準に対して、筆者は疑問に思う。確かに、使役、受け身や授受関係などは、「ます形」よりわかりにくい。したがって「ます形」がやさしく、使役、受け身や授受関係などが難しいと言える。しかし、多くの場合は、そういう意味の難易度ではなく、具体的に日本語能力試験のレベルに対応した文型のことを指している。つまり、N5～N1という五段階で区分している。実際、動詞、形容詞、形容動詞といった一定の規則のある用言活用を除けば、違う文型は互いに基礎や前提になるという関係性を持つものではない。言い換えれば、「あまり～ない」という文型と「わりに」という文型、どちら先に勉強しても差し支えがない。つまり、用言活用を覚えてしまえば、文型にとらわれることなく、内容を中心にテキストを選ぶことができるのである。もちろん、用言活用は一定のルールがあるにしても、それをマスターするには多くの学習者にとって一苦勞である。それについてまとめて一通り説明するが、全部覚えなくてもよい。どんな活用もかならず繰り返してでてくるので、時間が経てば、自ずと習得できるようになる。

### 3. 実施方法

それでは、以上述べてきた考え方に沿った実際の教え方について説明したい。

最初回の授業では、まず日本語の性格および日本語と中国語との関係について2点にしぼって紹介する。すなわち、(1)日本語は漢字、平仮名、片仮名交じりの言語で、漢字はもちろん漢語から借用したものであるが、平仮名、片仮名も漢字から変形したもの。(2)日本語は膠着語で、用言に活用があり、助詞、助動詞の使い方がとても大事である。そのうえ、学習の手順と各段階の到達レベルについて説明する。基本的には、1年半から2年間で日本語能力試験N1の水準に達することを目指す。

授業は、主に以下の4段階に分けて実施する。(1)仮名の学習、(2)用言および助詞の学習。(3)数百字程度の短文の読解。(4)千字程度のやや長い文章の読解。(5)文章の長さを気にせず、内容中心の学習。それぞれの段階の具体的な実施状況について少し具体的に説明しよう。(2)から(5)までの段階にわたって、筆者編著の『日本語能力試験N1文法詳解』(華東理工大学出版社、以下は『文法詳解』と略称)を手引きとして使っている。

(1)仮名の学習。仮名の説明は1時間程度で済ませる。特に中国語にない促音、長音の発音に注意を促すが、発音練習などは授業時間以外でしてもらおう。今は、スマートフォン、パソコンをはじめ、デジタル音声が容易に使えるから。ほとんどの人は、10日程度で、平仮名と片仮名を完全にマスターができる。片仮名の使用頻度は平仮名により低いため、多くの学習者は日本語学習を始めてからかなり時間が経っても覚えられないという事情を鑑み、50音図とローマ字配列で説明し、英語から来た外来語を例として挙げ、英語と日本語ローマ字読みの対応関係を覚えさせる。そうすると、片仮名語は単なる無意味な音節の配列ではなくなり、学習者は自分の英語語彙を有効に活用することができるようになる。

(2)文の構造および用言、助詞の学習。この段階の学習は仮名学習と同時進行し、4時間程度で済ませる。日本語文の構造を四種類に分けて説明している、すなわち(a)断定文(～です、～だ、～である)、(c)自動詞が述語となる文、(d)他動詞が述語となる文、(d)形容詞、形容動詞が述語となる文。(d)を除いて、文の構成順序は中国語と同じである。動詞、形容詞、形容動詞といったいわゆる用言には活用があり、活用規則を覚えておく必要があると説明し、例に倣って練習させる。五段動詞と形容詞の連用形の学習を例にすると、まず、次のような変形を示しておく。

五段動詞	書く	→	書か
形容詞	早い	→	早く

続いて、「行く」「待つ」「話す」「乗る」などの五段動詞と「暑い」「近い」「高い」「低い」などの形容詞の辞書形を与え、例に倣って変形の練習をさせる。ほかの活用形についてもだいたい同じである。いずれも規則正しい配列なので、五十音図に頼れば、間違える人はほとんどいない。最初は、何のためにいろいろな活用形に変えるか、つまり各種活用形の使い方について詳細に説明せず、ひたすら変形の規則を覚えさせる。助詞の学習に関して、一つずつ説明するのではなく、あらかじめ『文法詳解』にある助詞一覧表に沿ってまとめて助詞の分類を大雑把に説明する。総じていえば、共通な規則のあるものを先に抑えておく。説明は数時間で済ませているので、学習者は覚えきれないのは当然である。むしろ、最初から一気に覚えさせようとせず、用言活用と助詞が膠着語としての日本語文において重要な役割がわかってもらえるだけで事足りる。

(3) 短文の学習。前の2段階を経てから、いよいよ読解に入る。最初は日本語能力試験N4、N3程度の数百字の短い文章を4、5篇読ませる。この段階では、プリントにある漢字にはふりがな、外来語には原語を付ける。前の2段階では、教師の解説が中心だが、この段階からは、学生中心となり、教師はコーチ役に徹する。最初に読むものには、たとえば、こんな文がある。

今朝は早く起きたので、一人で散歩に出掛けました。時々坐って休みながら、川の近くを1時間くらい歩きました。犬と散歩している人やジョギングをしている人に、沢山会いました。

従来の方法とは違って、あらかじめ新出単語、それから文法事項の説明はしない。まず学生に一人一文ずつ朗読させたらうえ、中国語に訳してもらい、その後、教師は解説する、という手順をとるが、朗読の際に、発音を直したりする。面白いことに、全くの初心者でも、このような文はかなり正確に推測できる。間違いやすいのは「沢山」のような現代中国語となかなか結びにくいもの。それを固有名詞として、「〇〇さんに会った」というふうに理解する人がある。この段階では、学習者はまだ辞書使用の習慣を身に付けてないし、そもそも辞書をまだ購入していない人が多い。辞書を使用すれば、このような問題が解消できる。初心者でもこの文の意味をかなり正確に推測できるのは、中国人の漢字力に加えて、大人の常識が働いているからである。中国語文と比較してみよう。

1. 今朝は早く起きたので、一人で散歩に出掛けました。／今天早上起得早，一个人出去散步了。

2. 時々坐って休みながら、川の近くを1時間くらい歩きました。／时而坐下来休息，在河的附近走了一个小时。（「ぐらい」の意味がわからない）

3. 犬と散歩している人やジョギングをしている人に、沢山会いました。／见到遛狗的人、慢跑的人。（「たくさん」の意味がわからない）

上の日中対訳を見てわかるように、日本語漢字と中国語漢字がほぼ対応していて、学習者は日本語文法の知識に頼らなくても、「常識」で文の意味を十分推測できるのである。中国人日本語学習者にとっての効率的な学習方法は、文脈のなかで「文法」を学ぶことであり、「文法」を学んでから「文」を読むことではない。文1に即していえば、だいたい次のような具合に解説する。「今朝は」のなかの「は」は係助詞で、話題を表す。「早く」とは形容詞「早い」の連用形で、用言の一種である動詞「起きる」を修飾する。「起きた」とは一段動詞「起きる」の過去形。「ので」は原因を表す接続詞。「を」は移動性の動作の経過する場所を表す。「散歩に」のなかの「に」は、目的を表す。

はじめのうち、解説しなければならない文法事項が甚だ多く、一回、二回ではなかなか消化しきれないかもしれない。しかし、上記の文法事項は繰り返し出てくるもので、10回も解説すれば、自ずと理解できるようになる。つまり、ある特定の文法事項を集中的に学び、それが理解できてかつ使えるようになってから、別の特定の文法事項に移るという従来の教育法と違い、最初から文法事項を特定せず、生の言語表現において繰り返しを通して文法事項を学ぶ。これは一見手順の違いに過ぎないが、じつは従来の教育法と徹底的に違う。つまり、この方法の採用により、文法文型表現の制約に縛られることなく、内容中心に文章を選ぶことができ、文法文型中心の学習から内容中心の学習への転換が可能になったのである。

（4）やや長い文章の読解。数百字程度の短い文章を4、5篇読んで、日本語文の構造、用言活用、助詞の使い方などに慣れてきたら、徐々に文章の長さを増やし、内容も単純な叙述的ものから論理的なものに移っていく。たとえば、日本語学習を始めてから約1か月後、1992年日本語能力試験N2の過去問題「詐欺の話し」を読解文に使う。中国国内で広く使われている基礎日本語の教科書『新編日本語』（周平、陳小芬編著、上海外国語教育出版社）著者の設定した進度にしたがえば、1か月半の時点では第1冊第5、6課辺りになる。では、「詐欺の話し」と『新編日本語』第1冊第6課「大学の生活」の難易度を比較してみよう。

#### 「詐欺の話し」と「大学の生活」難易度の比較

内容	字数	文の平均的長さ(字)	単語数	主要な文型 (出る順番に従う、重复省略)
詐欺の話し	1072	19.08	263	～たり、～ちゃう、～ておく、



				動詞連用形+に、お段未然形+とする ～てくれる、わけにはいかない、 お+ます形+する、～てもよい、 五段動詞仮定形 ～てやる、五段動詞使役文
大学生の生活	518	9.97	131	動詞ます形、動詞ます形の否定 形、から～まで

上表の通り、文章全体の長さ、文の平均的長さ、助詞助動詞を除く単語数、文型のすべての面にわたって、「詐欺の話し」は「大学の生活」より複雑になっていることがわかる。それだけでなく、前者は相当複雑な展開を持つストーリーがあり、そのストーリーに基づいてある主張が提起され、つまり論理性がある。それに対して、後者は、ただ一日の出来事を時間順に叙述するにとどまる。

こんな難しい内容は入門者にはちゃんと理解できるのか、と心配の声が聞こえてきそうだが、実際、前の短文学習の段階を経て、学生は日本語の構文に少しずつ慣れてきているし、そして辞書あるいは『詳解』などで知らない単語や文型を調べる方法を次第に身に付け、文の意味を90%ぐらい正確に予測できる。とくに電子辞典を使うと、素早く検索できるうえ、複数の辞書を同時に参照することによって、わかりやすい説明や例文を選ぶことができる。もちろん、この段階でも引き続き用言の活用、助詞助動詞の使い方など文法事項を説明するが、繰り返しているうちに、要説明事項がしだいに減り、その分、読解のスピードも徐々に上がっていく。「詐欺の話し」の読解学習の所要時間は8時間程度で、「大学の生活」の編著者推薦時間とほぼ同じであるが、前者の長さは後者の半分ぐらいだから、どちらが効率的なのか一目瞭然である。この段階は約1か月続き、それで一学期が終わる。

(5) 内容中心の学習。第一学期に(1)～(4)の段階を終え、第二学期から(5)の段階に入る。つまり、文章の長さとか、文法表現とかあまり気にせず、内容を中心にテキストを選ぶ。基本的には、まず社会、歴史、文化、生物、暮らしなどのいわゆる「世界知識」から着手し、それから日本に絞っていく。

たとえば、第二学期の第一週目から、NHK番組「ダーウィン——神に挑んだオタク」を使う。番組はダーウィンの生い立ち、進化論の形成過程および影響などについて詳細に紹介するものである。学生たちは高校のとき、生物または歴史の授業でダーウィンの進化論を学んだことがあり、文章の内容に対して予備知識を持っている。読解の推測にあたって、それがかなり有利に働く。例えば、中にはこんな段落がある。

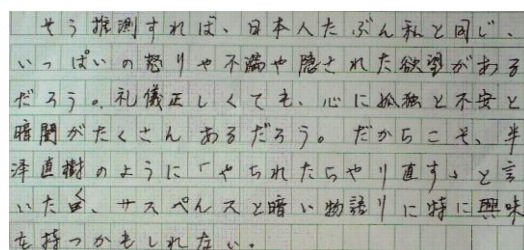
当時のヨーロッパは、人々の暮らしは勿論のこと、科学の世界までキリスト教が大きな影響を与えていた時代。すべての生き物は、偉大なる神様が作り出したもの、それ以来、姿、形は変わっていない、という考えが絶対でした。中でも人間は、神の自分自身の姿に似せて作った特別な存在。しかし、ダーウィンの考えに基づけば、人間もほかの動物と同じ祖先から枝分かれした生き物です。最も近いのは猿、ということになります。これは、神の行いを侮辱し、人間の尊厳を貶めるものでした。

「貶める」のような単語は、おそらく日本人の大学生でも難しいと思うが、中国人大学生にはわからない人はいないはずである。中国人学習者の漢字力、そして背景知識を持っているため、この段落の意味はほとんど説明する必要がない。しいてするなら、仮定形を復習する程度である。そうなれば、進度が速くなるし、学生も自分の推測がほとんどミスなしだから、達成感がある。

日本関係の内容なら、和室、日本料理、自然環境、雇用情勢、国債、生活保護、高齢化少子化などに及ぶ。例えば、生活保護の文章を読んで驚いたという学生は何人かいた。ずっと日本人はみんな豊かな暮らしをしていると思い込んでいたという。こうすれば、日本語学習と日本研究が同時進行でき、日本語科の学生でも大学生にふさわしい勉強ができるようになる。

#### 4. インプットからアウトプットへ

学生のアウトプットをも重視する。最初は既出文型を使って文を作る練習、それから紛らわしい類義語の使分け練習をさせる。毎回200字程度暗唱の宿題も出している。暗唱を続けると日本語の語感がよくなり、知らず知らず口頭表現および筆記表現の力が向上していく。第一学期の後半から、授業内容の要旨を口頭で表現する練習をさせている。多くの学生は、プリントを見ずに学んだ言葉や文型を使いながら、内容をまとめることができる。第二学期から、文型や類義語で文を作る練習を課し続けるが、ある文の勉強が終わってから、感想文を書かせている。たとえば、第二学期の中間あたり学んだ江戸川乱歩紹介に対する感想文に、こんな内容があった。



そう推測すれば、日本人たぶん私と同じ、  
いっばいの怒りや不満や隠された欲望がある  
だろう。礼儀正しくても、心に孤独と不安と  
暗闇がたくさんあるだろう。だからこそ、半  
沢直樹のように「やられたらやり直す」と言  
いたく、サスペンスと暗い物語りに特に興味  
を持つかもしれない。

「……そう推測すれば、日本人たぶん私と同じ、いっばいの怒りと不満や隠された欲望があるだろう。礼儀正しくても、心に孤独と不安と暗闇がたくさんあるだろう。だからこそ、半沢直樹のように『やられたらやり直す』と言いたく、サスペンスと暗い物語りに特に興味を持つかもしれない」。

この文は原稿用紙2枚の長さ。中には、誤用が少なからずある。例えば、「日本人」の後ろに助詞脱落しているとか、「やり返す」を「なり直す」に間違えたりしているが、伝えたいことがわかる。

ある学生がNHK番組Begin Japanology「花粉症」にならって、1200字程度の中国の大気汚染現状を紹介する文章を書いたが、その冒頭は次のようになっている。

「近来、中国では大気汚染の悪化が止まりません。北京市や、上海市、北方の各都市ではPM2.5による煙霧に覆われ、深刻な汚染に陥ります。汚染レベルの高い日に、視線が10メートル未満であり、交通が渋滞になり、人々の生活も乱されます。街角にはマスク

<p>高1A 中国学入門 PM2.5 年 月 日 節 頁</p> <p>近来、中国では大気汚染の悪化が止まりま せん。北京市や、上海市、北方の各都市では PM2.5による煙霧に覆われ、深刻な汚染に陥り ます。汚染レベルの高い日に、視線が10メー トル未満であり、交通が渋滞になり、人々の 生活も乱されます。街角にはマスクをつけた 人々が大勢現れます。彼らはPM2.5を防ぐ人々 です。では、悪影響ばかりもたらすPM2.5とは 一体何でしょうか。中国学入門、今回のテーマ はPM2.5。中国高度経済成長期に起こった環 境問題に迫ります。」</p>	<p>をつけた人々が大勢現れます。 お彼らはPM2.5を防ぐ人々です。 では、悪影響ばかりもたらす PM2.5とは一体何でしょうか。 中国学入門、今回のテーマは PM2.5。 中国高度経済成長期に起こ った環境問題に迫ります。」</p>
--	--

こうなると、日本語は単に学習対象にとどまらず、表現の手段ともなってくる。このような文章を書くには、さまざまな概念や状態を表す単語が不可欠だが、それら単語の多くは、日本語、中国語と共通していて、中国人学習者はふだんから使っている中国語の単語をほぼそのまま日本語文に入れるだけで文章の意味が通じる。すなわち、中国人日本語学習者の漢字力は、読解のみならず、作文にも大いに力を発揮できるのである。そして、いったん口頭や文章で自分の考えが伝わると、なかなか忘れなくなり、つまり理解から使用へとレベルアップするのである。

## まとめ

松浦友子は、日本語学習の方法を「文章を学ぶ」と「文章から学ぶ」との二つに分けているが、前者は単語、文型をはじめとする文章そのものに対する理解、後者は文章の表現内容の理解に力点を置き、両者の間に本質的な違いがある。『新編日本語』に代表される中国の日本語教科書は前者とすれば、筆者の模索しているのは後者である。単語、文型に拘らずに内容中心に文章を選んでいるため、語彙量が多い、すべていっきに覚える必要はない。動詞、形容詞、形容動詞といった構文に重要な役割を果たすいわゆる用言、そして文型以外は、理解するだけでよい。実際、繰り返し出てくるものは、わざわざ覚えようとしなくとも、そのうち自ずから覚えてしまう。

5年前にこの方法を取り始めたころ、同僚には不安視する人もいた。しかし、効果が現れはじめると、心配がある程度払い拭われた。この方法で日本語を学んだ人は、1年間で日本語能力試験N2の合格率が約75%、一年半でN1の合格率が約30%。2年でほぼ全員N1に合格でき、合格率は平均よりはるかに高くなっている。もちろん、南京大学は偏差値が高いので、学生の学力はもともと高いということも日本語能力試験の合格率を押し上げ、高い合格率の原因をすべて学習方法の見直しに帰するのは不適切かもしれないが、この方法は少なくとも偏差値中間レベルの大学の学生にまで適応可能と思う、この方法を採用にあたって、学習者に特別な能力を一つ求めているからである。

冒頭、中国における現在のような日本語学習の盛況は、30数年前から始まったに過ぎないと述べたが、じつは百年ほど前の清王朝の末ごろ、約5、6万の中国人が日本に留学していたと言われている。南京大学の創設者でもある清末改革派の一人張之洞（ Zhang Zhidong ）は、日本留学の推奨にあたって、「日本語が中国語に近く、覚えやすい」という理由を挙げている。また、戊戌変法の失敗により日本に亡命していた梁啓超は、日本語習得の体験を次のように語っている。「日本語の学習は、1年間でできる。作文は半年間、文章を読むなら小成し、数か月で大成する。」（「論学日本文之益」）と。しかし、そのことを知っている中国人日本語教師はいま少ない。思えば、上に述べた筆者の試みは、新しいものではない。百年前の先人たちのやり方に倣っているにすぎない。いずれにしても、漢字の国である中国の日本語学習者は、漢字を全く知らない国の人と同じ方法、同じ教科書で日本語を学ぶということは徹底的に見直さなければならない。

Recebido para publicação em 14-05-15; aceito em 16-06-15